

羽衣町物語り

~In Other Words~



鴨
端 淳三郎

「マギー。仕事ないか」

ダミアンは「小龍堂」の入り口の扉を開けざまに言った。

マギーは食べかけのチキンを挟んだトルティーヤを、ダミアンから見えないように体を半身にひねり隠しながら、

「今日はないよ」

と口をもぐもぐさせながら答える。

(盗りやあしねーよ。そんな食いかけ・・・)

‘むっ’となって無言で「小龍堂」をあとにする。

「小龍堂」は、泥棒通り商店街の端にあるマギーの経営する漢方薬店だ。

ダミアンはここでマギーから仕事を貰って暮らしている。この町でミカジメ料を払えない、もしくは払わない連中のために、何かトラブルのときは格安で処理をする仕事だ。パートタイムの用心棒と言ってもいい。が、もっぱら「鴉」と呼ばれる難民達の中で、一般商店に悪さをする、性質の悪い奴を追い払う程度の仕事がほとんどだったが。

「鴉」を払う者。だからダミアンの仕事は「カカシ」と呼ばれている。

ダミアンが転がり込んでいる「キッチン・キング」は、店主のレオが一人で切り盛りしている。最近では東羽衣町再開発工事のおかげで、作業員などのランチの客が増えて来て、レオもひっきりなしに中華なべを振っているが、このくらいの時間になると店は一杯飲み屋に様変わりする。まだ小学生のメイも健気に手伝っているが、ダミアンは柄じゃないので手伝わない。接客の出来る性質ではないのだ。でも親子で頑張っている脇で、ふらふらしているのはさすがに気が引けるので、こうして「薬屋」に御用聞きに来たというわけだ。

(まいったな・・・)

ズボンのポケットを弄ると千円札が2枚、くしゃくしゃになって出てきた。

「2千円となると・・・あそこだな・・・」

ダミアンは泥棒通り商店街から少し外れの安酒場が集まっている「ちょうちん横丁」に足を運ぶと、古木で装飾した小さな扉の店の前まで来た。その小さな扉の上の、ところどころ接触不良でチカチカしているネオンは、どうにか「Cerulean Club」と読めた。

「いらっしゃーい」

まのぬけたイントネーションだが、良く通る張りのある声に迎えられ少しビクつくダミアン。

オカマのマスター、通称オッサンだ。オッサンはカウンターの中でテキパキとお客のお酒を作ったりオーダーの料理を出したりしていたが、来客がダミアンだと気が付くとにっこり笑いながらカウンターの外へ出てくる。

「ダミアーン。久しぶりじゃないーい」

上背はそれほど高くはないが均整の取れたというか、むしろ逆三角形の胸板は、彼の個性を無視したら建築現場が似合いそうな風体であった。少しまつげも長いし浅黒い肌はつやつやしているところを見ると軽く化粧をしているのかもしれないが、びしっと着込んだバーテンダーの衣装は、しゃべりさえしなければ、女がほって置かないタイプだ。

でも、オッサンは女が嫌いだった。そしてダミアンがお気に入りらしい。

ダミアンはそういう趣味は無いので正直迷惑なのだが、安く飲ませてくれるのでつつい足が向いてしまうのだ。

「やあ、どうだい調子は・・・」

少し引きつり気味の笑顔を返して、当たりさわりの無い挨拶で帰す。

それでも十分にオッサンはうれしらしく、ダミアンに絡みつくように席の世話やら飲み物の準備やら甲斐甲斐しく面倒を見てくれた。

「Cerulean Club」はいわゆる‘バー’で労働者の社交場だった。みんな一日の労働の疲れや、緊張した神経をほぐすために、この店に立ち寄る。決して品の良い客ばかりではないが、みんなのおしゃべりと笑い声であふれている。ダミアンにとって、この町で心地のいい空間の一つなのだ。

オッサンはカウンターの中に戻りテキパキと仕事をしながらホールに目を配り、粗相をする客には遠慮なく罵声を浴びせる。

「おい！そこのサラリーマン！酒こぼしてるんだよ！汚したら殺すぞ！」

若いサラリーマンは慌ててネクタイでテーブルを拭きながら作り笑いを浮かべるが、オッサンは目を細めて睨みつけ、ちゃんと拭きとったか最後まで見届けていた。

ターキーをオン・ザ・ロックで傾けながら、ふと気が付くと、店の奥に設えた小さなステージで数人が何やら準備していた。

普段、この店は生バンドの演奏が催されるのをダミアンは知っていたが、歌姫は見おぼえのない女だった。褐色の肌が魅力的な‘ちょっといい女’だとダミアンは思った。

ダミアンの目線に気が付いたオッサンがカウンター越しに近づいてきて。

「なによ、やらしい目で見ちゃって」

と言ってダミアンの肘を抓る。

「あいいててて、痛いよオッサン」

「ああ、そっか。ダミアンは最近ご無沙汰だったから知らないのか。今、うちの一押しよ。ちょっといいでしょ彼女。歌もなかなかなんだから」

「ふーん」

店の中が暗くなり、生バンドをバックに少しハスキーなチョコレートボイスでジャズのスタンダードナンバーを披露する彼女のために、店の客は今までの馬鹿騒ぎをやめた。

（ああ、そうか・・・）

ダミアンはいつもより客が多いのは、この娘のためだったのかと始めて気が付く。

数曲のナンバーを披露した後、彼女のMCで客が盛り上がっていた。リクエストを募る彼女にみんな気を引こうと、歌えそうも無い曲を要求して彼女の困り顔を見たがる。バックバンドのバンマスがジャズしか出来ないからと固辞すると客はブーイング。見かねた彼女がアカペラで民謡を一節披露。その場にいたみんなが彼女に惚れた。

「もう一曲どなたかリクエストしてくださらないかしら。出来ればバンドの人たちのいいところも見せられるやつを・・・」

と彼女が客にふると、どういうタイミングかみんな黙っている。そのとき彼女とダミアンの目が一瞬あってしまった。

「そちらのカウンターのお客様いかがですか」

ダミアンは指名されてしまい、しかたなく。

「じゃ、『Fly me to the moon』をいいかな・・・」

彼女はうなずくとバンドの連中に目配せをして『Fly me to the moon』を最初のフレーズからやってくれた。

（とっさのこととはいえ・・・よりによってこの歌をリクエストするなんて・・・）

ダミアンの口元から苦笑いが出た。

そのとき店の扉が乱暴に開かれ、外からいかにも柄の悪そうなのが数人はいつてきた。

目の前にあるテーブルをひっくり返し一直線に彼女の前まで行き、一番前の細身の濃いサングラスの男が彼女の手首を掴み引っ張る。客の中から黄色い悲鳴まできこえてきた。

「ああ、みなさんお静かに。我々はラッキー・クレジットの債権回収事業班のものです。ここまで言えばお分かりだと思いますが、この方の負われている債務を、我社の正当な権利として回収しに來ただけの事ですのでご心配なく。我社は法と秩序に準じて業務をおこないます」
一団のリーダー格と思われるスーツの男が、苦虫を潰したような表情をこねくり回して、騒ぎ出す客に宣言をする。

「じゃあ、こっちも正当な権利として、てめえを殴ろうか」

いつのまにカウンターから飛び出てきたのか、オッサンが苦虫男の背後から声をかける。苦虫男は振り向きざまに、皮手袋をした拳でオッサンの頬に腰の入ったパンチを見舞う。

(喧嘩慣れしてやがる)

ひと目でダミアンにはわかった。

オッサンは下半身こそ微動だにしなかったが、殴られた勢いで上体を大きくねじって後ろを向き、鼻血を垂らしながら、

「いたあーいーい」

と、また変なイントネーションで叫ぶ。

その叫びが試合開始のゴングになり、店内は大荒れになった。あっちでもこっちでも殴り合いが始まり、当然オッサンも、苦虫男に報復の鉄拳をマウントポジションから振り下ろしていた。血飛沫が店内の照明に照らされて舞う。さっきオッサンに怒られていた若いサラリーマンも、小さな身体で嬉々として暴れまわっている。乱闘がみんな大好きなのだ。

ダミアンは女を見つけると、腕を取って店の裏口から抜け出した。

ビル街の裏路地まで逃げてきた二人は息を切らして、しばらく話が出来なかった。しかしなんだかおかしくなってきた、どちらからとも無く笑い出す。

「こんなの久しぶり・・・」

「走ったこと？笑ったこと？」

「りょうほう」

また、二人はおかしくなって笑い出した。

東羽衣町公園の水飲み場で喉を潤してから二人はベンチで一息ついた。

「名前・・・聞いてなかった・・・」

「マリアよ・・・あなたは」

「おれはダミアン」

ダミアンはちょっと照れて笑みを漏らす。

「なんであんな奴らから金なんか借りたんだ」

照れ隠しにダミアンは分かりきったことを聞く。ラッキー・クレジットと言えばこの辺じゃ有名な高利貸しだ。‘有名’とは「阿漕な商売で有名」という意味だったが。

「あいつらね・・・あたしの男だったやつの借金を払えって言うのよ。一度は払おうと思ったんだけど、なんだかばかばかしくなっちゃって・・・。私、福岡シティで歌わないかって誘われてるんだ。子供の頃から夢だったのよね、福岡シティで歌手になるのが。あそこなら私達みたいな商売も、もう少しましな生活が出来るんじゃないかと思って・・・それで、しらばっくれてたら、あんなことになっちゃった」

（まあ、そんなとこだろう）

ダミアンは予想通りの答えに、ため息をついた。

「男はなにやってんだ。男に払わせりゃいいじゃないか。もともとそいつの借金なんだろう」

「だめなのよ、マルコはろくでなしだから・・・。働かないし、格好ばかり付けてるし・・・」
うつむいて話すマリアにダミアンは誰かを重ねて見ていた。いや、ダミアンはそれが誰かを理解しているが、心の中で（似てねえよ・・・）と呟いていた。

「でも・・・もういいの。逃げてても始まんないんだから。明日、ラッキー・クレジットに行つて話をつけてくる」

何かを吹っ切ったようにマリアは顔をあげた。

「おいおい、そんなことしたらその辺の風俗で働かされるか、もっとひどい海外に売り飛ばされるのが関の山だぞ」

（馬鹿な女だ・・・）

とダミアンは思う。

マリアは憂いを含んだ笑みを浮かべるだけだった。

翌日、ダミアンはマルコ・バリアルドを探していた。

（何の得にもならない・・・）

ことを、十分わかっていながらマルコを探すダミアンは、

（俺も馬鹿だな・・・）

と自嘲する。

マルコの情報を得るのは簡単だった。ラッキー・クレジットの取立て屋を町で見つけて絞り上げるだけで、だいたいことは聞きだせる。マルコは町外れのホテル兼バーにいますと言う。行ってみると昼真からビールのジョッキを片手にテーブルに突っ伏している男がいた。

「マルコか・・・」

生気の無い目で見上げる男は、どこにでもいる気の弱そうな優男だった。

「あんたは・・・」

「マリアの代理できた」

「マリアの代理・・・」

「マリアは今日、ラッキー・クレジットに行くって言ってたぜ。お前の借金の身代わりでってことだよ」

「そうか・・・マリアが・・・」

マルコはたいして動揺するでもなく、ゆっくり立ち上がるとポケットからくしゃくしゃの札を引っ張り出すとテーブルに置いて、無言で店を出た。

「おい・・・マルコ・・・」

ラッキー・クレジット債権回収事業班の事務所は、ビル街の外れ、小さなビルが密集しているエリアの雑居ビルにある。マリアは応接テーブルの上で、契約書にサインをすところだった。苦虫男がデスクにふんぞり返って煙草を吹かしている。顔はバンソコだらけで口の横と目じりが赤黒く腫れ上がっており、試合翌日のボクサーのようだった。

「手間とらせっやがって、最初からおとなしく言うこと聞いてればこんなことにはならなかったんだ」

苦虫を噛み潰した顔がいつそう似合う。同席している苦虫男の部下もあっちこっち包帯やらバンソコ姿で痛々しい。

マリアがサインを書ききる間際。隣の部屋から騒々しい音が聞こえた。

「やかましいぞ！」

苦虫男が怒鳴った時だった。扉が開き昨日の細身のサングラス男が、やはりバンソコだらけの顔で入ってきた。後ろにはダミアンが彼の右手をねじり上げながら。

「ダミアン・・・」

マリアは驚きの表情でダミアンを見つめていた。

「借金はマルコが自分で払うって言ってるぜ」

サングラスを前え突き飛ばすと、ダミアンの後ろにマルコが立っているのが見える。

「マルコ・・・」

マリアの視線はマルコに注がれたが、そこに喜びの笑みは無い。

「マリア・・・いいんだ・・・俺が借りた金だ。自分で返すよ」

マルコは相変わらず生気のない目をしていたが、きっぱりと言った。

しかしマリアはため息をついて、その言葉に異議をとらえる。

「マルコ・・・あなた前にも同じ事言ったじゃない。それが出来ないから私がこおして・・・もう、いいのよ・・・終わりにしましょ・・・こんなことの繰り返し・・・あなたには出来ないのよ・・・約束を守るなんてこと・・・」

‘パシッ’

思わずダミアンがマリアに平手を上げてしまった。

自分でも何をしているのか分からなくなりかけていたが、我慢が出来なかった。

「マルコは自分で落とし前を付けるって言ってるんだよ。なんでそれが分かってやれないんだ。お前もお前だ。マリアにここまで言われてなんで黙ってるんだ。お前それでも男かよ」なぜこんな知り合ったばかりの奴らに熱くならなければならないのか、ダミアンにも分からない。でもダミアンの言葉でマルコは意を決したようにマリアに言った。

「福岡シティにいい話があるんだってな。この人に聞いたよ。お前の夢だったんだろ。あっちで歌うのが・・・行けよ。おれは大丈夫だ。借金返したらおれも行くよ。福岡シティに・・・」マルコらしい控えめな言葉だったがマリアにはその決意が伝わったらしい。

「マルコ・・・」

マリアは涙を流して手で顔を覆った。

「てめえら黙って聞いてりゃ勝手なことばかりぬかしやがって・・・」

苦虫男が文字通り苦虫を潰したような顔でしゃべりだす。

「だいたい払うの払わないのって議論がおかしいだろ。借りたものは帰す。期限や利子があるなら、それを守るってのが当たり前なんじゃないか。それを払うって言うてみたり、払わないっていつてみたり。そのうえ私がとか俺がとか・・・そもそも契約で期限に支払えないときには、保証人が払う約束してんだ。それがいやなら契約なんかしないでくれよ。それをこうやって主張すりゃ、昨日見たいに、みんなして袋叩きにされちゃうし・・・。そりゃ法定金利の枠超えて、しらばっくれることもあるよ。だけどまともな金利で他に貸してくれるところがあるのかよ。足元見てるってこっちはこいつらに飯食わせなきゃいけないし、こっちは足元見て逃げ回ってるやつらだっているんだからお互い様じゃねえか。借りるときは涙流して神様みただとか言うくせに、取立てに行きや鬼だつてぬかしやがる。だいたいマルコ。お前がまじめに働いたって返すのにどれだけ月日がかかるんだよ。その間にお前、また、やる気無くなっちゃうこともあり得るんじゃないのか。マリアに働いてもらったほうが、こっちはどれだけ安心か知れねえ。あんたら、そういうこっちの事情とか少しでも考えてくれたことあるのかね」

後半は少し涙声になっていた。部下達の中には周りをはばからず涙するものまでいる。みんな大変なのだとダミアンは思った。

結局、マルコがあらためて支払うことで納得した苦虫男は、マリアの契約書をみんなの前で破いて捨てた。マリアは数週間後には福岡シティへ旅立ち、マルコは今でも東羽衣町再開発の工事現場で汗を流している。

マリアと話した東羽衣町公園のベンチで煙草を吹かすダミアンは、木漏れ日の中でバイオリン弾きの少年の奏でる音色を、聞くとともにしに聞いていた。

「旦那さん、一曲リクエストしてくれよ」

ダミアンのほかに目ぼしい聴衆を見つけられなかった少年は、ダミアンに催促する。

「旦那って……。じゃあ『Fly me to the moon』を……」

コインを手渡しながらいいかけて言葉をとめた。

「いや、やめだ。何か陽気なのを一曲頼むよ」

にっこり笑った少年は、ダミアンの知らないロマの陽気な曲を、その小さなバイオリンから紡ぎだしていくのだった。